

術前診断が重要である。

9 RAにおける高度な骨破壊をきたした lumbar spondylitis の治療経験

梶谷 博也 (県立妙高病院 整形外科)
東條 猛・大塚 寛
三輪 仁・真部 達彦 (県立中央病院 整形外科)
渡辺 聡

症例は51歳 女性。15年来の RA。腰痛が急速に進行し、第2腰椎前方すべり及び第3, 4腰椎々間の高度な骨破壊, 変形があり, 右第4, 5腰椎神経根障害も伴っていたため手術的に加療を行った。

【経過】後方より進入し変形を矯正した後, 第3, 4腰椎々間不安定部に腸骨移植を行い, 第2腰椎から第1仙椎まで instrumentation による後方固定を行った。術後, 腰痛及び神経症状は改善。術後2週で起立, 歩行練習を行い, 術後4週で退院となった。

【考察】RAにおける脊椎変形は骨脆弱性, 多関節罹患による脊椎への負荷増大, 炎症による骨破壊などが特徴的である。本症例は上記諸因子の他, 肥満や過労などの力学的ストレスにより, 短期間に高度な変形をきたしたものと思われる。高度な脊椎破壊, 変形をきたした本症例の手術的再建には, 3DCT が特に有用であった。今後は骨癒合の経過とともに instrument のゆるみ・破損の有無を観察していく必要がある。

II. 特別講演

「慢性関節リウマチの MRI —— 早期診断と治療効果判定への応用を中心に ——」

昭和大学藤が丘病院 放射線科

杉本英治

第54回新潟麻醉懇話会 第33回新潟ショックと蘇生 ・集中治療研究会

日時 平成13年12月8日(土)

午前10時より

会場 新潟大学医学部

第2講義室

一般演題

1 成人両大血管右室起始患者における子宮筋腫核出術の麻醉経験

本間 隆幸・黒川 智 (新潟大学 麻醉科学教室)
馬場 洋

症例は27歳女性。生下時よりチアノーゼがあり, 両大血管右室起始症, 肺動脈弁閉鎖症, 単一冠動脈と診断される。心奇形に対する根治術の適応はなく経過観察されていた。安静時より PaO₂ 49.0 mmHg と著明な低酸素血症があり, NYHA III°であった。今回, 子宮筋腫に対し核出術が予定された。ミダゾラム, フェンタニル, ベクロニウムを導入し, 空気-酸素-プロポフォール-フェンタニル(総量 0.9 mg)で維持した。観血的動脈圧, 中心静脈圧, 経食道心エコーをモニタリングした。PaCO₂は30~35 mmHg を目標とした。術中の循環動態は安定しており著変なく手術は終了した。術後は未覚醒のまま ICU 入室とした。プロップオールとフェンタニルによる TIVA はチアノーゼ性心疾患患者の非心臓手術に有用と考えられた。

2 コントロール不良のてんかん患児に対する麻醉管理の経験

佐藤 剛・岡本 学 (新潟大学 麻醉科学教室)
多賀紀一郎

症例は9歳男児。胃食道逆流症根治術が予定された。術前での問題点は①てんかん発作と不随意運動②著明な口腔内分泌物③嘔吐であり, 対策と